

『パウロに与えられた務め②』

'22/06/05

聖書箇所：エペソ人への手紙 3 章 7-9 節（新約 p.376）

前回の礼拝で、私たちは、エペソ書が教える『奥義』というものについて一緒に学びました…。皆さん、覚えてくださっています？『キリストの奥義』とは何でした？⇒それは、エペソ 3:6 にあるように、「私たち異邦人も、契約の民であったイスラエルと同様の祝福にあずかることができる！」というものでした。例え、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、イエス・キリストを信じる信仰によって、全く同じように、神様の救いをいただくことができる！同じ一つのからだに属することができる！と言うのです。

正直言って、それは今、私たちが当たり前のように聞いている福音の内容と何ら変わりありません。それはつまり、言い換えますと、この時に、パウロたちが命を懸けて伝えていた、『キリストの奥義』(エペソ 3:4) というものが、ちゃんと正しく…、広く世界に伝わっていった、ということの結果でもあるのです。

命題：神がパウロに与えてくださった務めとは？

さあ！それでは今日も、私たちは先週に引き続いて、このエペソ 3:1-13 を通して、神様がパウロに与えてくださった務めというものを見ていくことによって、偉大な神様の恵みというものを再確認していきたいと思えます。今日は、その2回目、聖書箇所は、エペソ 3:7-9 を中心に見ていきたいと思えます。…神様は、パウロという人物を選び、ある任務を与えることによって、私たちに恵みというものを与えようとしてくださいました。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 3:1-9 をお聞きください。

I・パウロに務めを与えられた、神様のご計画！（1-6 節）

まずは前回の復習です。神様はパウロという人物を選んで、御自身の“御計画”に用いようとしてくださいました。先週は、その神様の御計画というものを学んだと思えます。エペソ 3:1-6 までをお読みします。

- 1 こういって、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。
- 2 あなたがたのために私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはすでに聞いたことでしょう。
- 3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。
- 4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。
- 5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。
- 6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

まず、このみことばから私たちが学んだことは、「真の神様とは、完全な御計画を持っておられる！」ということでした。その神様の御計画に従って…、パウロは、『キリスト・イエスの囚人』(エペソ 3:1) となったのです。だから、パウロは投獄されても落ち込むことなく…、神に感謝し、平安で居続けることができたのです。…この神様は、パウロだけでなく、ここにおられる私たちに対しても同じように、最善な計画を御持ちで…、私や皆さんのことを、神のために…、神様の栄光のために用いようとなさっておられます。だから、I テサロニケ 5:16-18 には、『16 いつも喜んでいなさい。17 絶えず祈りなさい。18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。』とあって、「神様がすべてのことを働かせて益としてくださるのだから、私たちは、いつでも喜んでいることができて、本当なら、すべてのことについて感謝できるのですよ！」ということを教えてくれているのです。

また、ここ 3-6 節には、4 回も『奥義』という言葉が使われていました。…確かに、旧約の時代には、現代ほど明らかにはされていませんでしたが、神様の御計画は、約束のイスラエルだけでなく、異邦人たちも、同じ、神の福音によって…、つまり、イエス・キリストを信じる信仰によって救われる、ということだったのです。ですから、5 節をご覧くださいますと、『この奥義は、…前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。』とあるのです。明らかに、聖書のみことばは、『時代』というものが変わったために、『奥義』というものの取り扱いが変わったのだ！ということを教えてくれています。だから、例えば、今、神様の救いの中心というものが、ユダヤ人たちではなく、かつては、「蚊帳の外側であった異邦人たち」になっているわけです。

II・パウロに与えられた務めの内容！（7-9 節）

では、今日は 7-9 節のみことばを観察していきたいと思えます。ここでは、神がパウロに与えられた務め(=任務)の内容について記されています。どうぞ、7-9 節をご覧ください。

- 7 私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。
- 8 すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝える、
- 9 また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。

①パウロの、『福音に仕える』という務め

先週、私たちが見た内容は、どちらかと言うと、神様が私たちに対してなしてくださった御計画について、という感じでした。神様は、そういったことを、まずはパウロに対して、特別に明らかにしてくださったのです。しかし、そういったことはすべて、神様の御業であり…、神様がパウロに知らせてくださったにしか過ぎません。でも、今お読みしましたみことばには、神様ではなく、パウロの働きについて記されてありました。それは、『福音に仕える』(エペソ 3:7) ということです。

『福音に仕える』ということがどういうことなのかと言うと、8 節にある通り、『キリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝える』ということと…、9 節の、『万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにする…』ということです。

まず、8 節の、『キリストの測りがたい富』ということですが、これは、イエス様を信じて救われたクリスチャンにしか分かり得ないと思われる。みことばは、この少し前で、救われる前の異邦人たちの姿について、このように教えてくれています…。エペソ 2:12、『そのころあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人々でした。』って…。『救われていなかった頃が如何に悲惨であったか？』ということは、救われた後でないと、なかなか分かるものではありません。…そうでしょ？…かつての私たちは、ここエペソ 2:12 にあるように、キリストから遠く離れていました。また、エペソ 2:1-3 のみことばが教えてくれているように、かつての私たちは悪魔の作った流れに従って、悪魔のグループに所属してしまっていたのです。

しかも、そんな私たちのために、神様が約束の救い主を遣わしてくださったのに、そのことを私たち異邦人は全く知らなかったのです！…例えば、ヨハネ 10 章では、イエス様こそが、本当の、『良い牧者』(ヨハネ 10:11) であると教えられています。何故なら、イエス様だけが、羊である私たちのことを…、私たちの必要

を一番よく御存知で…、また、私たちのためにいのちまでも捨ててくださった、本当のご主人様であるからです！

「人は、自分が仕える…、そのご主人様によって大きく左右される」と言って良いと思います。ですから、例えば、利己的で、自分のために下の者を利用するというような者に仕えてしまうと大変です。その主人に利用されるだけ利用されてしまうからです。しかし、イエス・キリストは全く…、その逆でした。イエス様は、当時の弟子たちに仕えるということを教えられ…、また、イエス様は、自ら進んで、弟子たちの足を洗うということや、あの忌まわしい十字架に向かっていくということで、それを実践していただきましたでしょ？だから、私たちは、聖書の教えるイエス様のことを心から尊敬し…、あがめることができますのです！

確かに、聖書には、数多くの厳しい教えや命令が山のようにあります。しかし、私たちクリスチャンは、それらを見ても、「何と、神様とは横暴なお方だろうか…」とは思わないのです！その理由が、ここにあります。それは、他ならぬ神様が…、また、イエス様が他の誰よりも仕えるということや…、また、人を愛するということ…、あるいは、人を赦すということや神様のみこころに従うということなどの、難しいことを、ご自分の身をもって実践してくださったからです。…でしょ！

先程見た、エペソ 2:12 では、『この世にあっては望みもなく、神もない人たちでした。』とありました。確かに、かつて、救われる前の私たちには、今現在、持っているような希望や神観というようなものを持ってはいませんでした…。かつての私たちの希望は？と言うと…、ほとんどが自分の願いや欲望が叶うことであり、自分の思い通りに事が運ぶようなことだけを望みとしていたのではないのでしょうか？…多分、そこに本当の神様のみこころなど考える余地はありませんでした。しかし、今はどうでしょうか？確かに、ある時には葛藤があるかも知れませんが、皆さんだって、自分の考えや願いよりも、神様のみこころや御計画が優先されることを願う者に変えられたでしょ？

だから、あのパウロも、こう告白してくれています。ピリピ 1:20-21、『20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。』⇒かつてのパウロは、ピリピ 3 章で、彼自身が証ししてくれているように、人間的なものを頼りにしていました。例えば、自分の血統であるとか、どんなグループに属しているかとか、他人からどう見られるかとか、そういったことをパウロも、かつては気にしていたのです。…でも、それは、パウロが救われる前のことで、パウロが救われて以降は、そういったものが「チリやゴミ同然」になってしまったわけでしょ？

そのように、イエス様を信じて、本当に救われたクリスチャンたちは、キリストを知ることができたこと…、キリストと一体とされたことを素晴らしい祝福であり、大きな恵みであると考えます。だから、絶対に信仰を捨てることができないのです！もしかしら、クリスチャンたちを迫害して…、教会に行かなくすることはできるかも知れませんが、しかし、本当に救われたクリスチャンたちは、心の中までは決して変えられません！

だから、みことばはこのようにも教えるのです。マタイ 10:22 で、『また、わたし(＝イエス様)の名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。』⇒イエス様が教えてくださったように、この聖書が教える信仰は迫害を招きます。それは、イエス様ご自身が迫害されたことから明らかです！だから、あのパウロも投獄され…、殉教していったのです。でも、イエス様は、ヨハネ 10:28 でこう教えてくださっています。『わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。』…このように、本当に救われたクリスチャンの信仰というものは、例え誰であっても奪い去ることはできないのです！

ここにおられるクリスチャンの皆さんもまた、そのことの生き証人じゃありません？…と言いますのは、ある方は、「信仰を棄てるか、家を出て行くか」という選択を迫られた方がおられます。しかし、それでも信仰を捨てることをしませんでした。また、別のある方は、信仰を持ったが故に、多くの財産を放棄した方がおられます。また別のある方は、信仰の故に、仕事を捨てて…、それまでの目標も夢さえも喜んで変えたという方もおられますでしょ。また、別の方は、信仰を持ったが故に、離婚を言い渡されたというような方もいらっしゃいます。このように、実に多くの方たちが、信仰を持ったことによって、人生の転機を経験されたことを私たちは知っています。…そのように、本当の信仰は、その人の生き方に繋がっていくのです。

どうか、皆さん。もう一度、I コリント 15:1-2 のみことばを思い出してみてください。『1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。』

⇒ここで教えられてあることは、その人の決意のほどです。もし、その人が、『よく考えもしないで信じたのでないなら』、その人は自分が受け入れ、また、それによって立っているはずの福音を忘れるようなことがないというのは、至極、当然のことです。

どうぞ、今日のみことばであるエペソ書 3 章に戻ってくださいます？エペソ 3:9、『また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするため…』とあります。異邦人にも同じように救いが与えられる、という奥義の内容が、奥義そのものであるなら、その奥義を明らかにし…、その奥義を世に明らかにしていくということも、これまた奥義であります。パウロたちに与えられた、その務めは完全に遂行されました。だから、当時のイスラエルからすれば、その存在さえも知られていなかった、ここ日本にまで福音が伝わり…、教会があちらこちらに出来て、現代の私たちクリスチャンたちが、神様の恵みによって、人種などの区別無く…、皆、同じように救いをいただくことができるという理解が当たり前になっているのです。

②パウロの 感覚 (＝受け止め方)

どうぞ、皆さん。少し前に戻って、エペソ 3:7 をご覧くださいます？『…神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって…』とパウロは言います。神様から与えられた働きの故に投獄されていながら…、パウロは、自分に与えられた務めを、『自分に与えられた“神の恵み”の賜物』であると言うのです。先週にも見ましたが、あのマタイ 25 章にあったように、本当に、神様を信じて救われた者は、その神様に仕えること自体が喜びであり…、その主人を喜ばせようとするわけです。パウロが感謝した理由は、そこに、『神の力の働き』があったからでもあります。神様は、私たちに、「救ってやったんだから、後は、自分で何とかしなさい！』とはおっしゃいません…。むしろ、「わたしがあなたを救ったのだから、その後も、神であるわたしの力によって働き…、わたしの力によって問題に勝利していきなさい。」と言って、私たちに神様の力を与え続けてくださる御方なのです。…そうでしょ？

ここ 8 節で、パウロは自分のことを、『すべての聖徒たちのうちで一番小さな私…』と語っています。このような表現は、別の聖書箇所でも見ることができます。例えば、I テモテには、こうあります。I テモテ 1:15-16、『15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。』⇒パウロは言います、「私こそ、罪人の中の罪人

である！」って…。「しかし、こんな私を神が救い…。こんな私を神が変えてくださるとは、何と、神様とは寛容な御方なのだろう！」と言うわけです。

また、どうぞ、**1コリント 15:9-10** のみことばをご覧ください。そこでも、パウロは、自分自身のことをこう言っています。『9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。 10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。』⇒…いかがでしょうか？このように、パウロは自分のことを、価値のある…。特別な存在だとは言いませんでした。

でも、皆さんもご存知のように、現代、多くのキリスト教会では、「神の目に、あなたは高価で尊い存在！価値ある存在なのです！だから、イエス様は、あなたのことを救ってくださったのですよ！」と教える傾向にあります。…でも、例えば、イエス様は、「自分の本当の価値を認める者は幸いです…」みたいなことを教えられましたか？…いいえ！イエス様は、「心の貧しい者こそ…、そのことに気付かされた者こそが幸いです！」ということを教えてくださいませんか？（マタイ 5:3）

ついでに、紹介した通り、パウロの場合、彼は自分の罪深さを思い知り、自分には大した価値が無いという認識を持っていたようです。でも、そんなパウロだったから、「私は、他の誰よりも熱心に神に仕えた！」と言うのです。天の神様は、完全な人間を用いられるではありません。…そんな人間、どこにも居ませんよね？神様が御用いになってくださるのは、自分の罪深さや、自分の弱さをしっかりと認めて、神の前にへりくだっている人物であり…。それ故に、神様に感謝し、神を愛している者ではないでしょうか？

どうぞ、皆さん、できましたら、**ルカ 7:36** 以降のみことばをご覧ください。そこで、イエス様は、その人が持っている「罪の認識と神様への献身の度合いとの関係」を、このように分かりやすく説明してくださいました。**ルカ 7:36-47**、『36 さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。 37 すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏のつぼを持って来て、 38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。 39 イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思っていた。 40 するとイエスは、彼に向かって、「シモン。あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生。お話しください」と言った。 41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりには五百デナリ、ほかのひとりには五十デナリ借りていた。 42 彼らは返すことができなかつたので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」 43 シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。 44 そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかつたが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。 45 あなたは、口づけしてくれなかつたが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。 46 あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかつたが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。 47 だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。』⇒このみことばについても説明は要りませんか？言わんとしていることは、非常にシンプルです。私たちが、自分の罪をしっかりと認識して、「こんな罪深い…。どうしようもない私を神が救い出してくださった！」ということを知れば思い知るほど、その人は神様の恵みを理解することができ…。より神様を愛する者となっていきます…。

それと、皆さんは、こんな出来事もよくご存知だろうと思います。イエス様が十字架に磔になられる少し前に、こんな風な会話がありました…。**マタイ 26:31-35**、『31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。 32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」 33 すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」 34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」 35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。』

⇒しかし、この夜、イエス様の予告通りのことが起こります…。そのことも、みことばははっきりと記してあります（マタイ 26:58-75）。この後の、弟子のペテロの気持ちを私たちは察することができます…。ヨハネ 21 章に、イエス様とペテロの…。その後の出来事が書かれてありますので、今度はそちらをご覧ください。

ヨハネ 21:1-8、『1 この後、イエスはテベリアの湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。 2 シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナの子シモン、ゼベダイの子たち、ほかにもふたりの弟子がいっしょにいた。 3 シモン・ペテロが彼らに言った。「私は漁に行く。」彼らは言った。「私たちもいっしょに行きましょう。」彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかつた。 4 夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかつた。 5 イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」 6 イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかつた。 7 そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとい、湖に飛び込んだ。 8 しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。』⇒皆さん、この時、どうしてペテロは、他の弟子たちとは一緒に行動しないで、湖に飛び込んだと思います？恐らく、イエス様に、2人だけのところで「お詫びしたかった」のではないのでしょうか？

しかし、実際は、それは叶いませんでした…。私たちも、こういったことを経験しないのでしょうか？正直、私は時々、こういったことを経験します。なかなか、お詫びの言葉というものは口に出しにくいものです…。その後、**ヨハネ 21:15-19**、『15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」 16 イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」 17 イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。 18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かつた時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」 19 これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであつた。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。』

⇒この後、ペテロは大きく変えられて…。全く、死をも恐れずに…。大胆に、イエス・キリストが十字架の死後、約束通り、3日目によみがえられた、約束の救い主であられることを語り続けました。伝承では、ペテロは、ローマで“逆十字架”に磔にされて殉教した、という言い伝えが残っています。

ある意味においては残念なことかも知れませんが…、「キリスト教の歴史は、迫害の歴史である。」とも言われます。それほど、多くの人たちが、その信仰の故に、いのちを捧げていったからです。日本でも過去、クリスチャンたちのことを「キリシタン」と呼んだ時代に、実に、むごたらしい迫害というものが起こりました…。しかし、そのことは、言い換えれば、殉教までしていった彼らが、それほどまでに神様のことを愛し…、神様に仕えていた！ということの証しであるとも言えます。

<励ましの言葉>

イエス様は、あなたを…、あなた自身が犯した罪の裁きから救うために、自ら進んで十字架に磔になってくださり、見事に、その死に対して、勝利してよみがえって下さいました！だから、初代教会の時代のクリスチャンたちは、それまでは皆、旧約聖書の律法にならって、土曜日に安息日を守っていたものが、それ以降は、その律法から解放されて、週の初めの日曜日の朝に復活されたイエス様を記念して、毎週日曜日に礼拝を捧げるようになっていったのです。どうぞ、今一度、神様の…、あなたのために支払ってくださった犠牲を覚えて、自分に与えられている務めというものを…、神様が自分に望んでおられることを吟味する者であってください。

それと、まだイエス様を信じて救われておられない皆さん。天の神様は、あなたを罪とその支配から救うため、イエス様を、今から 2000 年前、この世に遣わして下さって、本当ならあなたが支払うべきであった罪の裁きを身代わりに受けて下さいました…。あなたが、罪とその裁きから逃れるために必要なのは、このイエス様を信じて救われる以外にありません！どうか、1日も早く、このイエス・キリストを真の神、あなたが信じ従うべき救い主として受け入れてください。心からお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。